

---

原 著 論 文

---

タイ深南部のムスリムの変容  
— 教育的背景の異なるムスリムの「グルゼ・モスク事件」  
および「タクバイ事件」に対する態度と価値観についての考慮 —

柴 山 信二郎\*

Changes in the Attitudes of Muslims in the Deep South of Thailand  
— Investigation of the Attitudes and Sense of Values of Muslims of Different  
Educational Backgrounds Regarding the 'Kluse-Mosque and Tak-bai Incidents' —

Shinjiro Shibayama\*

(Received : December 15, 2005 ; Accepted : February 13, 2006)

Abstract

In ancient times, the deep south of Thailand was part of an Islamic state. This state has gradually been integrated into Thailand where more than 90% of the population believes in Buddhism. More than 80% of the population of the deep south maintains the Islamic faith to this day. Since the latter half of the 1950s, the Thai government has imposed various laws in order to convert all traditional Islamic schools (Ponoh) into private Islamic schools where a standard government-designed curriculum is to be taught as part of an assimilation policy. This gradual change in the educational system may affect attitudes toward social events in addition to Muslims sense of values in the deep south.

The present paper investigates Muslims' attitudes toward the 'Kluse-Mosque Incident' and the 'Tak-bai Incident' in order to examine whether differences in their educational backgrounds has affected their attitudes. In addition, the sense of values affecting their attitudes is considered. (*Waseda Journal of Human Sciences*, 19 (1) : 47-54, 2006)

**Key Words** : Attitude change, Sense of values, Educational system, Muslims in the deep south of Thailand,  
The Kluse-Mosque and Tak-bai Incidents

---

\*早稲田大学大学院人間科学研究科博士後期課程 (*Graduate School of Human Sciences, Waseda University*)

## 1. はじめに

仏教徒が人口の90%以上を占めるタイにおいて、深南部<sup>1</sup>はその人口の約80%がムスリムであり<sup>2</sup>、独特の文化・社会が形成されている。一方、政府による同化政策<sup>3</sup>やその他の環境の変化は、同地域の社会にも少なからず浸透しており、ムスリムの価値観も変容しているものと考えられる。

本稿では、教育的背景が異なるムスリムのイスラーム分離・独立活動に対する態度を調査・分析することにより、特定の社会事象に対するムスリムの価値観の変容を描き出すことを試みる。教育制度に注目する理由は、教育改革を通じた地域文化の変容を迫る政府の取り組みがそこに暮らす人々に与える影響のあり方を考察することは当該地域の未来像を描き出す上で有益であると考えられるためである。

深南部に関する先行研究は数多くあり、イスラーム分離・独立活動や教育制度を扱った研究も既に幾つか行われている。しかし、これまでの研究は同地域のムスリムを同質的に輝く傾向にあり、その内部差を描いた研究は限られていることから、未だ不十分な印象を残している<sup>4</sup>。

以下では、深南部の歴史的背景を概観し、また、同地域の教育制度とその変容について検討する。更に、聞き取り調査を通して異なる教育的背景を持つムスリムの「グルセ・モスク事件」及び「タクバイ事件」に対する態度を調査・分析し、その背景にある価値観の差異の考察を試みる。

## 2. 深南部におけるイスラーム分離・独立活動と反政府感情

現在の深南部にあたる地域は、スコタイ王朝から始まったとされるタイよりも800年以上長い歴史を持つといわれる<sup>5</sup>。Sale (2004, 242) によると、同地域のイスラーム化は中東諸国との交易を通して12世紀～13世紀頃に始まり、1500年にパッタニー王国国王がイスラームに改宗した後に加速したとされる。その後、パッタニー王国とシャム (1939年に「タイ」へ改名) の間では数度に亘り戦争が繰り返されているが、1808年に深南部がシャムへ政治的に統合されると、パッタニー王国スルタンの統治権限は縮小され、それに不満を持つマレー・ムスリム<sup>6</sup>はスルタンを中心に分離・独立活動を開始するよう

になった (Sale 2004, 250-251)。

また、政府は政治的統合のみに止まらず、民族的同化政策を推進し、文化・社会面でのマレー・ムスリムのタイ化を試みた。マレー・ムスリムのアイデンティティを否定するような政策が同地域のムスリムの感情を害したことは想像に難くない。橋本 (1987, 236-237) は、このような政策は政府に対する大きな不信感をムスリムに植え付け、分離運動拡大の大きな原因となったとしている<sup>7</sup>。

1960年以降、BNPP、BRN、PULO等の深南部の分離・独立を目的とするグループが次々に設立され<sup>8</sup>、分断独立活動や反政府活動は活発化することとなる。しかし、1980年代に入ると、政府の分離・独立活動者に対する投降者への免罪釈放の呼びかけを機に、分離・独立活動は一旦沈静化する。その後、分離・独立活動は暫く影を鹿めていたが、2001年の第1次タクシン政権発足後、爆弾テロ、警察派出所襲撃等が再び相次ぐようになる。2004年1月4日には、ナラティワート県の軍駐屯地を武装集団が襲撃し、兵士4人を殺害した上に、大量の武器・弾薬を強奪する事件が発生した。これを機に、深南部では再び襲撃・爆弾事件等が頻発するようになり、2005年11月までの約1年半の間に1,000人以上の死者を出している。この間、政府は同地域に戒厳令や非常事態宣言を発布し、軍に令状なしの逮捕・捜査権等を与え、治安維持に努めているが、襲撃・爆弾事件等は一方向に収まる兆しがない。2004年4月28日にはパッタニー県、ヤラー県、ソクラー県でムスリム若年者が中心となり警察派出所や軍駐屯所を同時襲撃し、襲撃に失敗したムスリム32名がパッタニー県ヤリン (Yaring) 郡にあるグルセ・モスクに立て籠もり、軍隊の集中攻撃を受けて全員が死亡した (グルセ・モスク事件)。また、2004年10月25日にはナラティワート県タクバイ郡の警察署前で、テロ事件の容疑者として逮捕されたムスリム住民の釈放を求めてムスリム住民約3,000人が抗議デモを行い、治安当局と衝突した。デモ現場では7人のムスリムが治安当局により射殺され、約1,000人が逮捕された。更に、逮捕者をパッタニー県にある軍キャンプに移送する途中、78名が移送中にトラックの中で圧死した (タクバイ事件)。

グルセ・モスク事件、タクバイ事件の両事件は、軍駐屯地襲撃事件以来続いている事件の中でも象徴

的な出来事と見做されており、当時の政府対応についての正否も含めて、事件真相の解明・解決が急がれている。

### 3. 深南部の教育制度とその変容

深南部にはイスラーム教育を取り入れた独特な教育制度が存在する。伝統的イスラーム寄宿学校（以下、伝統的ポノ）や「私立イスラーム学校（以下、宗教教育のみを行っている学校を近代的ポノ、宗教教育及び普通・職業教育の双方を行っている学校をスコラと記す。なお、伝統的ポノと近代的ポノの双方を指すときは単にポノとのみ示す。）」と呼ばれるイスラーム教育を実践する教育施設があり、現在でもタイにおけるイスラーム教育に重要な役割を果たしている。

1950年代後半以降、政府は同化政策の一環としてポノ改編政策を実施し、ポノを私立イスラーム学校として登録させた<sup>9</sup>。1966年以降に伝統的ポノの新規設立は禁止され、1971年までに登録を終えていないポノは違法な教育施設と見做すに至った。しかし、東在でも伝統的ポノは存在し続けており、そのことを教育省の役人もうすうすは知っている（尾中2002, 170）。

ポノは東南アジアへのイスラーム到来以降、宗教的知識を深めたい者やイスラーム教師を目指す者のための学習施設として存在してきた。ポノでは宗教教育一色のカリキュラムが行われており、六信五行、法学、神学、コーラン等を学ぶことができる。一方、ポノ改編政策により誕生した私立イスラーム学校は、原則的には宗教教育及び普通・職業教育の双方を行うことになっているが、実際は、宗教教育及びタイ語で行われる普通・職業教育の双方を行うスコラと、宗教教育のみを行う近代的ポノが存在する<sup>10</sup>。現在、一般的に「ポノ」と呼ばれるのは、近代的ポノのことである。

Pitsuwan (1985, 173-174) は、深南部の教育改革について、政府はタイ語による教育を導入することにより、近代高等教育を受けるムスリムを増加させ、タイの官僚組織に取り組むことを通して、ムスリムの民族的同化を図ったとしている。また、第12管区政府監査事務所特別政策委員会の資料（2005, 2）には、政府は伝統的ポノを国家安全にとって危

険な施設と見做してポノ改編を検討した、と記されている。これら先行研究や資料から伺えることは、政府はポノ改編政策により、深南部に暮らすムスリムのタイへの民族的同化を図ろうとしてきた、ということである。

ポノはイスラームの知識の継承という役割を担いながら、マレー・ムスリムとしてのアイデンティティの維持にも大きな役割を果たしてきた。一方、政府は国家という地域社会の枠組みから、ジャークイー語の使用禁止等の同化政策を実施し、また、社会集団としてのポノの役割を懸念し、半世紀以上に渡って様々な介入を行ってきた。その結果、近代的ポノの中には、宗教教育の運営方式にタイ語の教科書やタイ語による授業を導入したり、伝統的な床に座っての学習から近代的な机・イスを用いての学習へ移行する等、様々な変化が見られるようになっていく。また、ポノで学習する学生にも多様化が見られる。かつて同様に寄宿舎に寝泊りをしながらイスラームの学習に没頭する学生もいれば、日中は近代的教育を受け、夜間のみポノに通う学生もいる。また、近代高等教育を修了した後にポノでイスラームの学習を本格的に行う者もいる。著者が2000年～2001年に滞在した村落では、宗教教育と普通・職業教育の双方を受けられるスコラに子息を通わせる傾向が窺えた。これは将来の進学・就業を視野に入れた両親・本人の価値観の変化の現れであると捉えることができる。

近代教育の導入、ポノの私立イスラーム学校化、ポノ自身の変容が進展していく中、これら施設で学ぶムスリムの価値観も変容していることが推測される。

### 4. 聞き取り調査

著者は、深南部問題の象徴的社会事象として2004年1月以降の一連の事件の中からグルセ・モスク事件及びタクバイ事件を取り上げ、各々の事象がムスリムにとってどのような意味を持つのかを考察することを目的に、聞き取り調査を実施した。以下では、同調査から得られたデータを分析し、教育的背景の異なるムスリムの両事件に対する価値観を考察する。

なお、本調査に先立って、2005年1月22日から1月23日にかけて、本調査実施場所と同じ場所で、教

育的背景を限定せずに近代的教育機関で学ぶ22名のムスリムを対象に、タイ語で書かれた質問表を用いて事前調査を行った。事前調査実施当時、グルセ・モスク事件は少数の分離・独立主義者による活動であり、タクバイ事件は市民運動との認識が一般的世論であった中、回答者の反応は両事件をイスラームにより重点を置いて述べる傾向にあり「両事件に違いはない」とする回答が半数以上を占めた。また、政府の対応についても批判的な回答が大多数を占めており、肯定的な回答はわずかであった。

#### 4. 1 調査概要

聞き取り調査では、教育的背景の違いは両事件に対するムスリムの価値観に影響を及ぼしており、それは態度に重出されるとの仮定から、回答者を教育的背景は異なるが調査時点では近代教育制度において学習する（または終えた）ムスリムに限定した。

著者は、2005年5月22日から5月23日にかけて、ソクラーナカリン大学パッタニー校及びヤラー県ラチャットパット大学で調査を実施した。タイ語で質問項目を書いたメモを回答者に提示して、回答者に自由に回答してもらい、それを著者が書き取った。回答者は2つの大学構内で著者が出会ったムスリムを有為的に選出し、聞き取りは著者自身がタイ語で行った。質問項目は以下の通りである。

##### <質問項目>

- ① グルセ・モスク事件についてあなたはどのように思いますか？
- ② タクバイ事件についてあなたはどのように思いますか？
- ③ グルセ・モスク事件とタクバイ事件は異なると思いますか？
- ④ 政府がグルセ・モスク事件に対してとった対応についてあなたはどのように思いますか？
- ⑤ 政府がタクバイ事件に対してとった対応についてあなたはどのように思いますか？
- ⑥ 政府が両事件に対してとった対応について、あなたは異なると思いますか？
- ⑦ ムスリムとして、両事件についてあなたはどのように思いますか？

時間的制約及び調査日が休日であったことから、

2日間合計の回答者は5名に止まった。分析・考察の際には、回答者の教育的背景及び出身地を考慮し、ポノでの宗教学習経験を有する者と有さない者、深南部出身者とその他の地域出身者を選出し、比較を試みた。また、教育的背景以外にも歴史的背景等の価値観に影響を及ぼすと思われる要素を勘案した。回答内容及び分析・考察は以下の通りである。

#### 4. 1. 1 F

F（男性）は年齢17歳、パッタニー県内では最も優秀といわれる普通科高校の2年生であり、夜は近代的ポノでイスラームを学んでいる。出身・在住村落は村人全員がムスリムである。村落の産業は農業が中心で、村から数キロのところに近代的ポノがある深南部の典型的な農村である。Fはグルセ・モスク事件においてグルセ・モスクで射殺されたムスリムの一人からイスラームを学んだ経験を持つ。

「グルセ・モスク事件に対する政府の対処方法は暴力的過ぎた。より良い方法があったはずだ。タクバイ事件に対しても同様である。ムスリムはタイ人とは思われておらず、抑圧されており、その他タイ人と扱いが異なる。グルセ・モスク事件は悪人が起こした事件であるが、同じタイ人であることには変わりなく、政府はやり過ぎた。殺すよりも良い方法があったはずであり、問題の本質を見て対処すべきであった。タクバイ事件は普通の出来事であったのに、それに対して政府がとった行動は理解できない。政府が両事件に対してとった対応は余り変わらない。政府は両事件とも暴力を使用した。今までの出来事は悪人の仕業だとわかっていたが、最近頻発している事件は誰の仕業か疑問に思っている。オートバイに乗った狙撃手も何故ムスリムの服を着ているのか、実際はムスリムではないと思う。ムスリムは抑圧されている。世界中でだ。政府はムスリムをタイ人と思っていない。グルセ・モスク事件は悪人の仕業かもしれないが、タクバイ事件は違う。ムスリムは無価値なようだ。ムスリムは政府に自分たちの考えを伝えたいが、危険なので行動しない。分離・独立活動は19世紀初頭に始まったが、その頃は人殺しはなかった。人を殺すのは最近のことであり、これは政府の仕業であり、ムスリムは悪人だというイメージを人々に与えるためである。イスラームの教えでは

殺傷は禁じられている。しかし、最近では政府側の者だからといって殺すこともある。つまり、イスラームのためにやっているのではない。ムスリムの中には、彼らに賛同している者もいれば、政府はいつ捕まえるのかと思っている者もいる。ムスリムは自身を二級市民と感じている。役場での諸手続きにおいても、仏教徒と比べると、見下された態度をとられる。憲法に則した扱いがなされていない。政府はムスリムはこうであるというイメージ創りをしている。これはタイだけでなく世界中でだ。他教徒でイスラームを知らない者はムスリムを悪者と思っている。南部ではムスリムが乱暴を受けても問題にならない。ハジ・スロン<sup>11</sup>やソムチャイ弁護士<sup>12</sup>も行方がわからなくなりそのままとなっている。また、警察はイスラームに無知なので我々に豚を食べさせようとする。こういう話は村やモスクでは話しているが、普通は話さない。殺人等を犯しているムスリムはお金や麻薬のために罪を犯しており、真実のムスリムではない。ムスリムはこうだから、というような報道によりムスリムのイメージが作り上げられている。タイ人はムスリムを「ケーク」<sup>13</sup>とか「豚を食べないやつ」と呼び、ムスリムを見下している。しかし、政府に賛同できる部分もある。ムスリムの中にはタイ語が話せない者もいるので、私自身は兵士とのコミュニケーションをとる手伝いをしている。エジプト等での留学から戻って来た人達は色々な知識を持っているが、これまでの事件はこれら人々の仕業ではないと思う。ムスリムなら悪業になるこのような行為はやらない。いずれにしろ、皆はムスリムの仕業だと思っている。以前は事件があった時、村人は誰がやったかを知っており、警察が来るとその人をかばった。現在は村人も誰がやったか知らない。」

Fはグルセ・モスク事件については「悪人が起こした事件」、タクバイ事件については「普通の出来事」と表現し、新聞等の報道で見られる一般的認識と同様な見方をしている。一方、両事件に対して政府がとった行動については「暴力的過ぎた」と一様に批判的である。また、「ムスリムは抑圧されている」、「タイ人と思われていない」、「ムスリムは悪人とのイメージを与えるために政府がやっていること」等の発言からは、先行研究でも度々指摘されているように深南部のムスリムがその歴史的経緯等から抱いている

被差別者、被抑圧者、反政府感情が見受けられる。

更に、深南部出自で近代的ポノで学ぶFの語りからは「イスラームでは殺傷を禁じている」、「ムスリムなら悪行になるこのような行為はやらない」等のムスリムとしてのアイデンティティー、地元コミュニティ内での連帯の強さが感じられ、その背景には同地域のムスリムに伝統的な、また、イスラーム的な価値観が存在することが推し量られる。

#### 4.1.2 T

Tは大学で日本語を専攻する22歳の女性である。パッタニー県県庁所在地の出身であるがポノや私立イスラーム学校で宗教教育を受けたことはなく、イスラームは子供の頃に週末にモスクで勉強した程度である。

「グルセ・モスク事件はタイ政府に何かを訴えるための行動であつたと思う。しかし、彼らは無知のために手段がわからず、行動が過激になったのだと思う。一方、軍や警察はイスラームについて無知で、理解していない。タクバイ事件はグルセ・モスク事件とは異なる。ニュースで聞いた限りだが、犠牲者は何も知らない人が多かった。警察・軍隊がとった強行策には賛成できない。両事件は異なる。平和を乱した点では同じだが、目的が同じではない。グルセ・モスク事件は悪人が起こした事件だが、タクバイ事件は潔白の人の釈放を求めるものであつた。しかし、深南部の話なので、他の人々は同様の事件と見做している。グルセ・モスク事件に対する政府の対応は良かったと思う。但し、モスクでの出来事なので判断は難しかっただろうが、もし早急に対応していなければ事件は長引き、更に強硬な方法を取らなければならなかったと思う。しかし、タクバイ事件に対してとった行動は暴力的過ぎた。人が多かったので苦労したとは思いますが、政府のとった方法は良くない。警察や軍により放水され、叩かれ、疲弊していた人々を非人道的な方法で輸送し、そのために多くの死者が発生した。犠牲者や行方不明者が未だに明確にされていない。政府はいつもそうだが、結局あいまいなまま終わらせる。私としては政府は嫌いである。良くやっていると思う部分もあるが、権力欲に取り付かされている。やりたいことをやり、お金をばら撒くだけ。良いところは、様々な面で開発が推進されている点である。両事件に対する政府の

対応は違わない。政府は問題を最短で解決しようとした。グルセ・モスク事件では人が少なく、モスクの中での出来事なのでより行動が簡単だった。タクバイ事件は何も知らない群集が多かったため、潔白の犠牲者が大勢出た。ムスリムの分離・独立要求は多い。ポノではイスラームを教えており、マレーシアやアラブ諸国から資金を得ているので、人々はそれらの国の方がタイより良いと考えるようになる。また、それらの国で働けばより多くのお金を得ることができると考えている。しかし、タイの近代教育制度で勉強していると、そうは思わない。分離独立するしないは関係なく、生活様式はこうあるべきだ、と考える。例えばイスラームは何故豚を食べないのか、仏教徒に知ってもらいたい。現代は物質主義になっており暮らしにくい。以前は事件もなく良かった。学校では中学3年のときまでベールもつけてはダメだったが、政府に要求して制度を改定させ、1998年にはベールを着用できるようになった。また、宗教学習の時間は仏教徒と別れてイスラームを勉強ができるようになった。以前はムスリムも仏教の授業を受けなければならなかった。」

Tは「両事件は異なる」が「政府＝の対応は違わない(両事件を最速に終結させようとした)」としながらも、グルセ・モスク事件について「政府に何かを訴えるための行動」、「悪人が起こした事件」として、政府がとった行動についても「良かった」と述べている。他方、タクバイ事件については「潔白の人の釈放を求める行動」とし、政府の対応については「賛成できない」と述べ、その理由として「暴力的過ぎる」、「非人道的」、「潔白の犠牲者が多数でた」等を挙げている。Tは「政府は嫌い」としながらも、両事件に対する政府の対応について賛否両論の態度を示し、政府に一定の評価を与えていることが伺える。

Tの語りの中で特徴的なことは「タイの教育制度で勉強していると、ポノで勉強しているような考えは持たない」、としている点である。イスラーム国家が最良と考えるのではなく、現状を認めながら、非イスラーム教徒にもイスラームを理解してもらいたい、という価値観が見受けられる。

#### 4.1.3 S

S (23歳) はナコンシータマラートにあるラチャ

パット大学を昨年卒業し、パッタニー県内の某企業で技術者として勤務しているナコンシータマラート県出身の男性である。Sも前述したT同様にポノやスコラで宗教教育を受けたことはない。普通高校、高専、短大、大学と進学しており、イスラームの勉強は子供の頃にモスクでした程度。両親はイスラームを勉強させたかったが、本人が将来の職業選択を考慮して、普通教育課程に進学した。

「グルセ・モスク事件は誤解から生まれた悲劇である。ムスリムは潔白だ。モスクでお祈りをしていただけの潔白な人も巻き込まれた。タクバイ事件は自由の権利を求めて起こした行動であった。政府のとった行動のために多くの潔白の人々が死ぬことになった。グルセ・モスク事件は悪人が起こした事件であるが、タクバイ事件は潔白の人の解放を求めたものである。グルセ・モスク事件の場合、政府は行動を起こす前に良く考えるべきであった。殺された人々の中には潔白な人もいた。先ず話し合い、潔白な人々を解放させるべきであった。タクバイ事件に対する対応も同様である。政府は先ずよく考えるべきである。亡くなった人達は何もしていない。政府はこの点に責任を持つべきである。両事件に対する政府の対応は同じである。政府は先ずよく考え、双方と話し合わなければならない。責任をとるべきだ。亡くなった人は皆、僕と同じムスリムである。潔白でない人に対して政府の行動は正しかった。しかし、潔白な人は死ぬべきではない。その結果、政府は間違っていると思われた。ナコンシータマラート県出身なので、両事件については余り知らない。」

深南部の出身ではないSは、タイにより同化した所謂「タイ・ムスリム」である。本インタビュー調査の事前調査からは、深南部を除く地域の出身であるムスリムのグルセ・モスク事件及タクバイ事件に関する関心は相対的に低いという結果が出ており、S自身も「両事件については余り知らない」と述べているように、両事件に対する関心は低く、報道等で述べられている以上の認識は見られない。「ムスリム」としての観点からの特別な主張は見られず、イスラーム的な価値観や深南部のムスリムに特有の感情は見られない。

上述してきたように、F、T、Sと教育的背景等が異なる3人のムスリムの態度と価値観には以下のような特徴が見られる。深南部出自でポノでの学習経験を持つFの語りからは、深南部のムスリムがその歴史的経緯等から抱いている被差別者、被抑圧者、反政府感情やイスラームに対する厳格さが見受けられ、マレー・ムスリムとしての伝統的な価値観が伺える。他方、深南部出自ではあるが近代教育制度内で教育を受けてきたTは、タイの教育制度で勉強しているとポノで勉強しているような考えは持たないと明確に言及しているように、ムスリムとして一定のアイデンティティーを保ちながらも、タイ国民として自己を受け入れ、現状を認めながら、非イスラーム教徒にもイスラームを理解してもらいたい、という価値観が優位となっているのが見受けられる。一方、出自も深南部ではないSの態度には、ムスリムとしてのアイデンティティーが感じられず、イスラーム的な価値観は見られない。以上のように、教育的背景が異なる3名のムスリムの両事件に対する態度と価値観には差異が見て取れる。

## 5. おわりに

本稿では、教育的背景が異なるムスリムの「グルゼ・モスク事件」と「タクバイ事件」に対する態度を描写し、教育制度の変容がムスリムの両事件に対する価値観に与える影響について考察を試みた。しかし、それにより浮かび上がった価値観の差異は、サンプル数が限られていることもあり、一般化できるものではない。

西井(2001)など多くの研究者が述べているように、深南部地域はイスラームに特に厳格な地域であるとされる。しかし、2000年以降継続して行っている筆者の現地調査の経験からすると、宗教的实践は必ずしも厳格に行われているわけではないという印象を受けている。例えば、筆者が居住していた隣家の家主は「六信五行を正確に理解している者は少ない」と嘆いていた。また、尾中(2002)は「厳格なムスリムにとってはスポーツや音楽などであっても異教徒によるものは望ましくないものと捉えられるためテレビによるタイ文化の影響はさして強くない」と述べているが、筆者が滞在したり調査を行った村落では、タイ語によるドラマや歌番組を人目を

憚ることなく観賞していた。このように、同地域の社会・文化の少なからぬ変容が見受けられることから、同地域に暮らすムスリムの価値観にも差異が生じていることは十分に推測できる。

今後の課題として、ムスリムの価値観の変容を総体的に理解していくために、様々な社会的要因・文化的要因等について考察を加え、より詳細で豊かなデータ収集・分析を行う必要がある。

## 註

- 1 本稿では、深南部とはマレーシアと国境を接しているパックニー県、ヤラー県、ナラティワート県の3県を指す。
- 2 タイのムスリム人口に関する統計は、発表機関により異なっているが、一般的には全人口の約4%~5%といわれている。その内約80%は深南部に暮らしているか
- 3 タイにおける同化政策は第二次世界大戦前および戦時中の第一次ピブーンソンクラーム政権によって開始された。当時の政策はムスリムに対して弾圧的なものであったが、第1次ピブーンソンクラーム政権後は融和政策化されていった。橋本(1987, 231)によると、政府ま信教の自由の保障、一部イスラーム法の適用、高等教育機関への優先入学等の他、社会・経済開発を実施する等の融和政策がとられた。しかし一方では、ポノ(伝統的宗教学校)の廃止やイスラーム中央集権制度の確立等の強権的な施策も実施されている。
- 4 例えば、Satha-Anand(1987)やMaluuleem(1996)は、1960年代より開始された政府の開発政策にもかかわらず、分離・独立活動が継続的に行われているのは、同地域の歴史・社会・文化的要因、役人の不公平な対応等が理由であるとし、同地域のムスリムは一様に政府に不満を抱いており、分離・独立活動主義者に対して賛同的または同情的である、と述べている。
- 5 深南部の歴史的背景は、タイの教科書には記載されていない。そのため、同地域の歴史的背景を知るタイ人は極めて少数である。
- 6 「マレー・ムスリム」とは、マレー語の一方言であるジャーウィー語(Yawi)を日常語とする等マレー文化を継承している深南部に暮らすムスリムをさす。深南部に暮らすムスリムは自らをマレー・

ムスリムと称し、タイに同化したタイ・ムスリムと一線を画し、自らのアイデンティティを主張する傾向にある。ジャーウイー語は話し言葉としてはマレー語ケランタン方言に近いが、表記にはアラビア語を用いる。彼／彼女達にとりジャークイー語は日常使用する言語以上の意味を持っており、それを話せることがマレー・ムスリムの一件であるというように考えている。

- 7 例えば、1942年にピプーン・ソクラーン改権は同化政策の一環として、ジャーウイー語による教育の禁止、ジャークイー語文献の禁止、マレー系民族衣装の禁止、マレー系またはアラブ系の氏名の使用禁止する等の政策を打ち出した (Sale 2004, 258-259)。第1次ピプーン・ソクラーン政権が倒れた後、信教の自由の保障、一部イスラーム法の適用等、同化政策は緩和されたが、イスラーム中央集権制度の確立や伝統的イスラーム教育制度から近代教育制度への転換等に見られるように、イスラームの国家管理体制への組み込みが進められた。
- 8 BNPP, BRNは1960年、PULOは1967年に結成された (Janchitfah, 276-277)。
- 9 Wisalaphon (1981, 41-42) によると、1965年から1970年の間に私立イスラーム学校化した伝統的ポノの数は、1965年は21、1966年は40、1967年は40、1968年は40、1969年は40、1970年は40となっている。また、同施策が講じられてからの5年間に登録申請を行ったポノは426校に上った。
- 10 尾中 (2002, 108-100) によると、1998年時点で「スコラ」は130校前後が開校しており、「近代的ポノ」は160校以上存在している。一方、生徒数を見ると、「スコラ」生徒数は上昇を続けており、1986年に「近代的ポノ」生徒数を上回った。しかし、「ポノ」生徒数も減少しているわけではなく、近年はどちらの生徒数も増加傾向にある。
- 11 1947年、差別的扱いを受けているとする深南部のムスリムは7項目の要求事項を政府に振出した。この動きの中心人物であったハジ・スロンとその息子及び友人2名は1954年に行方不明となった。警察・軍隊により拉致され、殺害されたとの説もある。
- 12 在タイ豪大使館爆破を企てていたとされるムスリムの容疑者の弁護を引き受けていたソムチャイ

弁護士協会会長は、2004年6月にバンコクで失踪した。警察官の関与が疑われているが、事件の真相は明らかになっていない。

- 13 「ケーク (kheek)」はタイ語で「よそ者」という意味がある。

## 参考文献

(日本語文献)

- 尾中文哉 2000. 「南タイの「伝統的」イスラム寄宿塾「ポノ」の文化的多元化」茨城大学人文学部紀要社会科学論集第33号 121-126.  
 -2002. 地域文化と学校-三つのタイ農村における「進学」の比較社会学 北樹出版.  
 西井涼子 2001. 死をめぐる実践宗教：南タイのムスリム-仏教徒関係へのパースペクティブ世界思想社.  
 橋本卓 1987. 「タイ南部国境県問題とマレー・ムスリム統合政策」東南アジア研究25巻2号 東南アジア研究センター 233-255.

(英語文献)

- Pitsuwan, Surin 1985. Islam and Malay Nationalism : A Case Study of the Malay-Muslims of Southern Thailand. Thai Khadi Research Institute, Thammasat University.  
 (タイ語文献)  
 Klum Nayoobai Phiseet Samnak Phuutruat Raachakaan Pracam Kheet Truat Raachakaan Thii 12 [第12管区政府監査事務所特別政策委員会] 2005. "wiwattanaakaan Roongrian Eekchon Soon Saasanaa Islaam Nai Kheet Kaan Suksaa 2" [教育第2管区における私立イスラーム学校の進展] Yala.  
 Sale, Rattiyaa 2004. "Pattani Daamsalaam" [パッタニー・ダルサラーム] Ratpattani Nai Sriwichai, Boorisat Mathichon Camkat, 236-301.